



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

64

國家圖書館出版社

六月四日

六月二日



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLISHING FOUNDATION

國家圖書館
編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

64

國家圖書館出版社

第六四册目錄

昭和十六年（一九四一）旅行日誌（第三十八期生）

高橋克夫	第四班		一
有野芳郎	第四班		四七
藏岡習志	第四班		八五
樋藤軍二	第五班		一〇三
木村正三	第五班		一一五
坂井一	第五班		一四三
永江和夫	第六班		一六九
山本君平	第六班		二〇九
岡田孝之	第六班		二三三
秋貞健一	第七班		二五九
山田公太郎	第七班		二七九

松本浩一	第七班	三〇三
中條康彰	第八班	三三七
尾藤昇	第八班	三五九
白井秀夫	第八班	三八三
山本隆	第九班	四〇五
岡幸雄	第九班	四三三
山谷儔	第九班	四五五
久保田太郎	第九班	四七一
瀧石彰一	第九班	四八五
山田順造	第十班	五〇一
鈴木隆康	第十班	五二九
石崎昌雄	第十一班	五五五
道旗林三郎	第十一班	六〇三
鈴木信	第十一班	六一五

昭和十六年度

大旅行日誌

第四班

高橋克夫

六月六日。晴。出発。

一行三人。有野君、藏岡君と僕。藏岡君と僕は楊樹浦碼頭

頭から東亜海運の興運丸に乗船。有野君は独り汽車で荻

つ。朝十時出帆。夜十二時鎮江着。先着の有野君ランチ

で迎へに来る。當地第一流の萬全樓に投宿。月夜。時々

雷鳴。

六月七日。晴。鎮江。

鎮江は此の春一度来た。金山寺、甘露寺など。可成り

有名な古寺の外には此れと言ふ程のものはない。漫然と

街を歩く。埃溜の如き感じ。戦地特有のカーフエー文化の

院 貧 養 教 養 所 見 學。	民 衆 小 學 校、	鎮 江 縣 立 實 驗 小 學 校、	鎮 江 私 立 北 門 孤 兒	六 月 八 日。	晴。	鎮 江。	先 生 も 生 徒 も 教 育 に 対 す る 熱 情 と 言 ふ の 更 に な い。	々 支 那 の 小 學 校 見 學。	駱 目。	學 校 と 言 ふ よ り は 遊 び 場。	ま だ 時 局 を 認 識 せ ぬ も の が 多 い こ と な ど 大 い に 説 く。	路	送 り 生 産 部 門 の 勞 力 不 足 を 補 ふ こ と、	現 地 の 邦 人 中 ま だ	を も っ と 明 確 に 主 張 す べ き こ と、	支 那 兵 の 捕 虜 を 内 地 へ	陸 政 策 の 生 温 る さ を 懷 憤 り、	日 本 は 戰 勝 國 と し て の 權 利	低 級 さ。	鎮 江 日 本 國 民 學 校 訪 問。	此 處 の 先 生、	日 本 の 大
---------------------------------------	------------------------	--	--------------------------------------	-------------------	----	---------	---	--	---------	--	--	---	---	--------------------------------------	---	--	---	--	--------------	---	------------------------	------------------

れは日本人なりと言ふ自覺を常に持つて居る必要あるこ	日本人は支那のために努力するのはいいが同時に我	して最後まで確保しなければならぬこと。支那で働く	氏は語る。長江の内河航行権は日本の大陸政策の據点と	少し間があるのので東亜海運のハルクにサトウ氏を訪問。	午前十一時半宿を出る。小雨の中を洋車で碼頭に向ふ。	六月九日。雨後曇。鎮江から揚州へ。	する。大陸に於ける日本的天主教及基督教の必要を痛感	する。	その支那人の子供が東洋人だと言つては白い眼で嘲笑
---------------------------	-------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------------	---------------------------	-------------------	---------------------------	-----	--------------------------

と。　　悲しく支那で生活してゐる日本人は余りに支那的に
 なり過ぎる結果　日本の国力をかゝつて縮めるようなこ
 とになる。華中蚕糸が日本蚕糸界に與へた悪影響の如しな
 ど。　　莊司氏は信念の人、烈々たる愛國者である。意外な
 處で意外な事に書を聞かされた、心新たまる。午後二時、ホ
 ンホン蒸汽鎮江を發つ。揚子江を横切り、大運河に入る。
 草を食む水牛。　　ロバの尻に股加つて歌ふ牧童の群。西
 岸のなめ仲々面白い。午後五時揚州着。　　綠楊旅社に宿
 る。　　夜、南京中のためさん苦るしむ。支那旅行には
 ノミとり粉とアンモニア水必携する真理を悟る。

六月十日。 雨。 揚州。

生徒が全部で七人と言ひ日本國民學校へ見學に行く。

校長さんの山野氏にお會ひして教習事情をうかがふ。 先

生は無舞踊と音樂が専門。 大陸の子供達、特に揚州の様に

邦人の少ない所の日本の兒童達は、友達や自然に恵まれ

ぬことから、又周囲の全然違つた生活から來る寂寥の末

とかく健全な人間性の生長がゆがめられ、恐れがある。

その不幸を音樂と無舞踊で~~神~~けんとするのか先生の主張

である。 全く同感。 午後六時半より僕たちの歓迎會を開

いて下さる。 民會の事務所。 焦不人、省立中學の宮崎

那服が制服。真に整ってゐる。ただ男女共學は問題。	男子は日本の中学生と同様のしもふり、女子は紺色の支	では日本語の春が来た ^と なり組の合唱を聞かして貰ふ。	礼の號令をかけて礼をする。宮崎先生の日本語のクラス	次に場州中學。僕たちが教室へ入ると日本語で起立、	實驗小學校參觀。設備。教師や生徒の態度意外に立派	六月十一日。晴。場州。	通譯の李先生頗負け。書院生の面目躍如。	日語教師本澤山先生。有野君 ^得 意の支那語で大いに談ず。	先生。中學校長張先生。同教頭陳先生。縣立實驗小學校
--------------------------	---------------------------	--	---------------------------	--------------------------	--------------------------	-------------	---------------------	---	---------------------------

應	中	縣	六	さ	那	る	何	大
し	の	立	月	空	人	に	百	家
て	身	中	十	工	の	過	人	族
お	体	學	二	し	應	か	の	で
な	の	を	日	さ	接	な	家	有
い。	大	見	晴	を	振	い。	族	名
教	小	る。	揚	感	り	夜。	が	な
科	が	省	州。	ず。	の		一	阮
書	甚	立		眞	あ	桃	緒	家
か	だ	中		實	ざ	サ	に	を
極	し	學		は	や	菜	豪	見
め	い。	より		何	か	館	華	物。
て	れ	幾		處	さ。	で	な	
粗	の	分		に	美	張	生	昔
末。	大	劣		在	大	先	活	は
先	小	る。		り	辞	生	を	清
生	が	一		や。	令	主	送	朝
徒	身	つ			句。	催	つ	に
と	体	の			何	の	て	仕
は無	の	級			か	招	居	た
	大	の			物	待	た	た
	小				足	宴。	ら	大
	と				り	支	い	儒
	相				な		か	で

關係な風で、独りしやべつてゐる。生徒は後にとり残さ
 れた様なあつけない顔付き。先生は生徒と心を同じく
 して、共に學び共に教へる心をまたぬばならぬ。敬信、愛
 が教育の根本である。午後、縣人横井小三郎氏に面會。
 富春茶室で揚州名物の饅頭と豆腐乾系を食ひ乍ら話す。
 何と言つても支那人は金で動く。日本は先づ欧米に劣ら
 ぬだけの資本力で支那民衆に生活の安定を與へて、民心
 を獲得しなければならぬ。現に自分の居る麦粉会社の支
 那人労働者は、もと知らぬあた英米系の會社から依然と
 して従來の俸給を無償でもらつて居り、とかく日本人に

反動的であるとは横井氏の辯。

六月十三日。晴。揚州。鎮江。南京。

揚州には予定よりも数日長く滞在した。しかし去るに

當つて長か過ぎたとはちつとも思はない。此の街は何處

かしり人の心を惹く處がある。純支那的な城廓や街路の

持つ滋味の故であらうか。横丁のちよいとした明口に見

かける揚州姑娘の奥床かしいウラシツクな美しさの故だ

らうか。何故か知らない。揚州は心小難い街である。午

後二時揚州発。南京に着いたのは夜の九時。馬車に揺ら

れど長い長い中山路を走る。靜かな首都の夜。緑の並木。

